

# 『ほんま』という日本手話の関西地域変種に見る日本語との混淆の姿-

森 壮也(日本貿易振興機構アジア経済研究所・早稲田大学)

## 1. はじめに

日本手話には関西地域変種があることは広く知られているが、語彙の違いについての言及であることが多い(「これが大阪の手話でっせ」出版編集委員会, 2001; 大杉 2009)。それ以外の用法面での違いについては、今里 (2014, 2019) などわずかな研究があるのみである。本報告は、この関西地域変種の/ほんま/という語(手話語彙)について、それが音声日本語の「ほんま」から口型借用(マウジング)をしているものの、「ほんま」とは異なる用法が見られること、またその用法は関東地域変種をメインとした標準的な日本手話とも異なることを指摘し、そうした用法の背景にある言語現象について検討する。

## 2. 研究目的と先行研究

### 1.1 研究目的

日本手話の関西地域変種は従来、語彙の違いが注目されがちであったが、近年、語彙の違い以外の違いについても関心が高まってきた。例えば今里 (2014; 2019) などはそうした研究である。一方、本報告では、これらとは少し違った角度から日本手話の関西地域変種の事例を見てみる。取り上げるのは/ほんま/とラベル付けされる手話である。この手話は図1のような手話である。軽く開いた利き手を小指側を相手に向け人差し指の先の親指側の内側に当たる部分を図のように顎に二度ほど当てる表現である。また口型が重要であり音声日本語の「ほんま」とほぼ同様の口の動き(マウジング)が共起する。

この手話語彙については、従来、日本手話の標準変種(JSL-e)が手指形式は同じであるが音声日本語の「ほんとう」を借用したマウジングなる手話語彙と同じであるとされ、一方、関西の変種であるためマウジングが関西タイプの「ほんま」になっているだけだと解釈されることが多かった。また JSL-e/ほんとう/では、「本当」という日本語と同じ意味を持つと考えられている。一方、関西変種/ほんま/ (以後、日本手話の語彙を意味する場合にはこのような / / で囲む形を用いる。通常の「」で囲んだ形は音声言語である) は音声日本語関西変種の「ほんま」と同じ意味を持つと考えられ、音声日本語の関西変種の方は多くの文献で音声日本語標準語の「ほんとう」という語と同義であるという説明がされている(井之口ほか 1992; 堀井 1999; 小林ほか 2006; 浅田 2017)。

しかし、この手話の用法を丁寧に観察すると日本手話標準変種とも、音声日本語関西変種とも異なる使われ方をされているケースが多いことに気づく。本報告では、この/ほんま/という手話がどのような特徴を持った使われ方をしているのか、その用法の背景にあると考えられる日本手話と音声日本語のせめぎ合いの中での両言語の混淆の様相について述べたい。

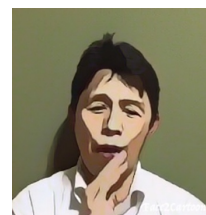


図1 手話語彙 /ほんま/

### 1.2 先行研究

すでに述べた今里(2014)では、「日本手話西日本方言(JSL-w)」という言い方がされているが、日本手話のAUX(助動詞)について関東で用いられているものとは違う「互いに理解しあうのに全く問題はないが、一部の語彙と、このAUXの用法や語順に見られるように、文法のレベルにおいても少々異なっている部分が見受けられる場合がある」としており、「JSLの方言間の相違については筆者が知る限りまだ包括的に研究されたことはない」と述べている。

また今里(2019)では「日本手話西日本方言」の/行く/と/来る/という2つの空間移動を示す動詞の分析が行われている。分析から、これらの語が比喩的拡大とSVC(連続動詞構文)環境下における文法化が進んだ使い方がされていることを明らかにしている。また口型についても「JSLにおいて、ある語が文法化し機能語を生み出す背景には、SVCと共に、決まった口型が使われる事実は既に観察されている(今里 2009; 2010; Imazato 2016, p.60)としているが、ここでの口型は「ウ」という動詞で特徴的なものに限定されている。しかし、今里は「手話言語に特徴的な口型が文法化において果たす役割や、音声言語の文法化プロセスとの関連を明らかにすることは、今後の課題である。」(同上)と口型が文法化プロセスに果たす役割に注目しており、口型が単に音声日本語の模倣という位置付けに止まらない作用を持つ可能性を示唆している。以上の2つが管見の限りでは、日本手話の関西変種に関する語彙の形の変異以外の研究であるがいずれも音声日本語

との関連については述べられていない。

一方、文末表現については、音声日本語の研究であるが、「西洋近代の諸言語に比照しては、私どもはますます、日本語についての文末詞研究の重要性を痛感する。彼我の言語間での、文表現構造の相違異に明らかなどおり、文末詞なるものはまた、文末詞の活動する文表現末尾の特定文末部なるものは、まったく日本語にとっての特質的なものである。」(藤原, 1982, p.i) とある。この文末詞とは今日、「終助詞、感動助詞と言われているもの」(同上, p.p.xv) であるが、「要するに文の終りにあってはたらくもの」(同上) であり、藤原は、これを助詞という範疇で言い切らないというのがその論の趣旨である。本論で議論しようとする /ほんま/ も明らかに通常の「助詞」とは異なる。また日本手話には通常、助詞はないことについては衆目的一致するところである。しかし、手話語彙について「文末詞」と似た機能を持つものがあることは注目して良い。

### 3. 研究内容

本研究の対象は JSL-w で /ほんま/ とラベル付けされる手話である。すでに述べたような軽く開いた利き手で小指側を相手に向け人差し指の先の内側に当たる部分を顎に二度ほど当てる表現である。この /ほんま/ では、音声日本語の「ほんま」口型を同時に伴う。JSL-e にも手指が同じ手話があり、両者の違いは口型のみと解釈されていた。JSL-e は、「本当」というマウジングが示す日本語と同じ意味を持つと考えられている。一方、音声日本語の関西変種では多くの文献で「ほんま」は「ほんとう」と同義であるとされている(堀井 1999 等)。従って、JSL-w でも /ほんま/ は音声日本語の「ほんとう」と同じ意味を持つと考えられていた。しかし、この理解が当てはまらないケースが次のように多数ある。

- (1) /忘れる/ Pt<sub>1</sub> /調べる/ /ほんま/ Pt<sub>2</sub> (日本語訳: 自分で調べるべきなのにあなたは調べていないわね。)
- (2) PT<sub>1</sub> 決める /ほんま/
- (3) <Pt<sub>2</sub> への呼びかけ> 田中 /男/ /勝手/ /決める/ Pt<sub>3</sub> まあまあ /気分が悪い/ Pt<sub>3</sub> PT<sub>2-pl</sub> /相談/ /から/ /決める/ /ホンマ/ PT<sub>3</sub>
- (4) /北海道 /ろうあ/ /連盟/ /教育/ /委員会/ /会う(対する)/ /話す/ 完了 /同意/ 領き /けれども/ /まず/ /本人/ /会う/ PT<sub>3</sub> /話す/ /次/ /会う/ /話す/ /ホンマ/ PT<sub>4</sub>
- (5) /ろう-/ /学校/ /場所/ /幼稚-ブ /から/ /手話/ /教える/ /ほんま/ PT<sub>3</sub>
- (6) /遊び/ /勉強/ /どうする/ (疑問) /勉強/ /ほんま/ (同: 遊んでばかりいて、勉強はどうするの? 勉強しないとだめでしょう。)
- (7) /CL 動詞(だらだら走る)/ /遊び/ /目的/ Pt<sub>2</sub> / (一生懸命) 走る/ /ほんま/ Pt<sub>2</sub> (同: だらだらと走っているけれど、遊びでやっているの? 真面目に走らないとだめでしょう。)
- (8) /やる/ /ほんま/ Pt<sub>3-pl</sub> /待つ/ Pt<sub>3-pl</sub> (同: ちゃんとやらないとだめでしょう。みんなも待っているんだから。)
- (9) /会社/ /来る/ /遅い/ Pt<sub>2</sub> /早い/ /来る/ /ほんま/ (同: あなたは会社に来る時間が遅いじゃない。早く来ないとだめでしょう。)
- (10) /宿題/ 完了 /まだ/ Pt<sub>2</sub> ゆれ 怒+驚 (顔ジェスチャー) /今日/ /今日/ /必要/ /今日/ Pt<sub>3</sub> /昨日/ /言う/ /ほんま/ /準備/ /ない/ Pt<sub>1</sub>

(Pt は指差し、その後の添字は指差しの方向が何人称を指しているかを示す。例えば PT<sub>1</sub> なら話し手を指差し。pl は複数) 以下、これらがどのように「ほんとう」という意味と異なった使われ方をしているのかを検証する。

### 4. 研究方法

本研究では、この事例の分析を次の3つの観点から行った。

- ①まずは事例の確認である。この事例が何か突発的な特殊なものではなく、JSL-w のユーザーの間で広く見られるものであることの確認のために、ろうの親から生まれ、幼少時から手話に接している関西のろう者複数人に /ほんま/ という語彙の使用について尋ねた。また日本語とのバイリンガルであるろう者にも協力してもらい、日本語での意味を確認した。一方、「ほんま」という音声日本語関西変種についても公開されている文献により「ほんま」の使用事例を確認すると共にそのネイティブに同様の用法があるかどうかを確認して、両者の比較を行った。
- ②次にこの事例に特徴的な語順が「動詞+ /ほんま/ + (主語を示す) 指差し Pt」の形で現れていることに注目し、この語順の持つ意味を検証した。具体的には、この語順を少し入れ替えることで意味をなす文が可能なのかどうかということを検証したものである。またここで用いられる動詞にも着目して、JSL-w の動詞でどのような動詞がここで可能なのかを 1. で事例を集めるにあたって協力して頂いた JSL-w のネイティブ・サイナーの方々に確認した。
- ③最後にこうした語順が持つ効果とこの事例の意味するものとの間の関係について考察した。

## 5. 研究結果

### 5.1. 事例の確認結果

その結果、この/ほんま/という手話の使い方には、

(11) /ほんま/難しい/ネ (口型) /ほんま/

(12) /今日/今日/必要/今日/PT<sub>3</sub>/昨日/言う/1/ほんま/準備/ない/PT<sub>1</sub>

のように、音声標準日本語の関西変種の「ほんま」や関東変種の「ほんとう」と同じような意味、またこれらと意味や用法が似た JSL-e の/ほんとう/と同じように使うケースもあるが、そればかりではなく、すでに 4. で掲げたような少し変わった使い方があることが分かった。

JSL-w の/ほんま/では、口型は音声日本語関西変種の「ほんま」と似たマウジングであるが、その用法は後者ではあまり見られない以下の 3 つの特徴を持つことが分かった。

② 動詞を直前に伴う

③ 直前の動詞を A とすると「(本来) A すべきだったのに A しなかった」という意味を持つ

④ 文末でのみ用いられ、手話文の主語を示す指差しは/ほんま/よりあとにも用いられなければならない。またこうした文末の指差しに相当する語は音声日本語関西変種では見られない。

これらは単に JSL-w が JSL-e と異なっているのみならず、音声日本語関西変種とも異なっている独特の表現を持ち合わせていることを示す。それを典型的に示す以下の 5 例を例としてその特徴を改めて分析してみる。

JSL-e の/本当/とは少し違う使われ方

(12) /分かる/簡単/説明/ほんま/PT<sub>2</sub>

(2) PT<sub>1</sub> /決める//ほんま/PT<sub>2</sub>

(3') PT<sub>2-pl</sub> /相談/から/決める//ほんま/ (3) から抽出)

(4') /けれども/まず/本人/1/会う<sub>3</sub>/話す<sub>3</sub>/次/1/会う<sub>4</sub>/話す<sub>4</sub>/ほんま/PT<sub>4</sub> ((4)から抽出)

(5') /ろう/学校/場所/幼稚-ブ/から/手話/教える//ほんま/PT<sub>3</sub> ((5)から抽出)

いずれの事例も 3. で示した日本語訳を見ると分かるように JSL-e の/本当/と異なり、「ほんとう」という意味ではなく、/ほんま/は、動詞のあとに出現、直前の動詞を A とすると「(本来) A すべきだったのに A しなかった」という意味になる。

こうした用法は、例えば、英語における仮定法過去 (Subjunctive mood, Cannon 1959) での以下の用法と似ている。<sup>1</sup>

If I had enough money, I would buy the house. (三宅 1987)

JSL-w の/ほんま/のここでの用法も、現在の状況と違うことを伝える時に用いる用法であることがこの対比で分かる。

### 5.2. 語順の特異性

この/ほんま/は、上の事例でも分かるように、文末に位置し、動詞+/ほんま/+Pt (主語を示す指差し) という語順を持つ。

この語順についてはいくつか指摘できることがある。

まず音声日本語関西変種での「ほんま」での文末の使い方としては、「ほんま、それやったら話し合いがなりたへんやん。」や「ほんまどうするつもり?」、「ほんまはどうしたいん?」のような意味的に近そうな使い方は可能だが、これらはいずれも動詞が後置されており、JSL-w での用法とは異なる。もし「～、ほんま」と倒置するとしつこい印象になるほか、「ほんま、あんさん」のように JSL-w のように最後に相手を意味する語を入れるのは、こてこての大阪弁という印象で受け取られて、吉本新喜劇ならともかく日常の日本語関西変種には同様の語順は見受けられない点も注記しておきたい。

次に口語関西変種では、倒置が多いと一般に言われていることと対比してみる。これはつまり、

「私は、それを、今日から、止 (や) めました」と言うところを、「止めとんねん、今日から、それっ、ワシな」(「ワシな」は、省略可)

「あかんかったわ。言うこと聞けへんねん。ほんまガンコなやっちゃ。あいつときたら」

(私も、いろいろ言いました。あの人も意固地な人ですねえ。聞く耳持たないみたいで・・・) (汪 2019, pp. 290-299) のような用例に示されるようなことであるが、これらと比べてみても動詞+/ほんま/+Pt という語順の特異性が目立つ。つまり音声日本語では動詞の先行こそ可能なものの、この語順が多いとは言えなさそうだからである。

### 5.3 語順の持つ効果と日本手話ゆえの語順の特製

<sup>1</sup> 「仮定法過去の表す意味は、現在時あるいは未来時に関する hypothetical meaning であり、仮定法過去完了は過去時に関する hypothetical meaning を表す。すなわち、発話者が仮定法を含む節の命題内容は「偽」であると判断しているという前提を表す。」(三宅 1987)

最後にこうした通常とは異なる語順の持つ効果とこの文末表現が日本手話で見られるということの意味について分析しておく。次の例文をJSL-wのネイティブの皆さん複数人に検討してもらった。

(13) /忘れる/ /自分自身/ /調べる/ /ほんま/ Pt (忘れたとは、本当は自分で調べておくべきことです)

この通常、用いられるJSL-wの文に対し

(14) /忘れる//ほんま//自分自身//調べる/ Pt

という/ほんま/が動詞よりも前に来る語順になると、「忘れないでやればよかったね。(話し手が)調べるね」あるいは「忘れる?ほんとうに?調べてね」、「忘れないでやればよかったね!調べるよ」といった意味になってしまい、「(本来) Aすべきだったのに Aしなかった」という意味は失われてしまう、あるいは意味不明の文になってしまうという結果が得られた。

この事実から明らかなのは、ここでの/ほんま/の動詞に対する倒置は、音声日本語の関西変種のように一般的なものとしては許容されておらず、今回分析しているような意味も持たないということである。同時に/ほんま/といったいわば一種のモーダリティを示す語よりも指差しが後に来ているという日本手話の基本文法である指差しで文の主語が示されるという文末コピー現象は保持されているということである。この2点は、この表現があくまで日本手話の文法の範囲内にあり、日本手話の語順の規則がより強力で、モーダリティ表現はそれよりも弱い形でより左に提示されるという特徴からである。

## 6. 結論

このJSL-wの独特の用法は非常に興味深い。それは口型では[「ほんま」というマジョリティ言語(音声日本語関西変種)の影響を受けつつも、用法は「ほんま」から想像される用法と異なるばかりか、JSL-eの/本当/とも異なる意味・用法があり、「(本来) Aすべきだったのに Aしなかった」という意味を持つようになっている。また周辺の語順の分析からは、音声日本語とも異なり、語順の文法も日本手話の中で発達したと考えられる。手指日本語と呼ばれる日本語の文法の上に日本手話の語彙を載せた言語とも異なる様相が観察されたことで、日本手話に地域変異が標準変異とは異なった形で存在するのみならず、(口型の観察のように)音声日本語からも影響は一部受けているという興味深い混淆の仕方が観察されたと言える。

現在の調査では、この表現は他県で中学部まで卒業したものを含む大阪市立ろう学校卒業生で40代以上ではよく見られることが観察されているため、起源はこの卒業生世代にあると思われる。また/ほんま/の度合いに程度変化を持つ変化形があるとの指摘もあるため、今後、この形のヴァリエーションや前置可能な動詞の範囲についても議論していきたい。

## 7. 謝辞

本稿がなるにあたっては、関西地域のデフ・ファミリー及びネイティブろう者複数に例文の収集でお世話になった。また音声日本語の関西変種についても、音声日本語ネイティブの方々にデータの収集等でお世話になった。その他、お世話になった皆様にこの場をお借りして感謝したい。

## 参考文献

浅田秀子 (2017) 『現代感動詞用法事典』 東京堂出版

Cannon, C. D. (1959). A Survey of the Subjunctive Mood in English. *American Speech*, 34(1), 11-19.

堀井令以知編 (1999) 『上方ことば語源辞典』 東京堂出版

藤原与一 (1972) 『方言文末詞(文末助詞)の研究 (暁・中・下)』 春陽堂書店。

今里 典子 (2014) 「日本手話における主語/目的標示の助動詞について」 『言語研究』 146 巻: 31-50.

Imazato, Noriko, "Japanese Sign Language Syntax" □ *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, Minami Masahiko (ed.) □ pp.483-510 □ 2016.

今里典子 (2019) 「日本手話の「来る」の分析」 『神戸市立工業高等専門学校研究紀要』 (57):55-60.

井之口有一・堀井令以知編 (1992) 『京ことば辞典』 東京堂出版

小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂 (2006) 『シリーズ方言学2 方言の文法』 岩波書店。

「これが大阪の手話でっせ」 出版編集委員会 (2001) 『これが大阪の手話でっせ』 星湖舎。

三宅亨 (1987) 「現代英語における仮定法の周辺」 『桃山学院大学人文科学研究』 22(3),47-66(1987-03-31).

大杉豊 (2009) 「日本手話言語地図の作成に向けて」 『言語』 38(8): 50-59.

汪聞君 (2019) 「文末における代名詞と「拡張(何ヲ)とがめだて文」との類似性」 『日本語・日本文化研究』 29, :290-299.